



共感は可能か？ - 関西大学大学院心理学研究科シンポジウム概括 -

| | |
|----------|---|
| 著者 | 串崎 真志, 雨宮 俊彦, 岡村 達也, 小林 孝雄, 中嶋 智史, 福島 宏器, 菅村 玄二, 関口 理久子 |
| 雑誌名 | 関西大学心理学研究 |
| 巻 | 4 |
| ページ | 1-24 |
| 発行年 | 2013-03 |
| その他のタイトル | Is Empathy Possible?; An Overview of Empathy Symposium 2012, Kansai University |
| URL | http://hdl.handle.net/10112/10454 |

共感は可能か？

— 関西大学大学院心理学研究科シンポジウム概括 —

| | |
|---------|---------------|
| 串 崎 真 志 | 関西大学文学部 |
| 雨 宮 俊 彦 | 関西大学社会学部 |
| 岡 村 達 也 | 文教大学人間科学部 |
| 小 林 孝 雄 | 文教大学人間科学部 |
| 中 嶋 智 史 | 京都大学大学院教育学研究科 |
| 福 島 宏 器 | 関西大学社会学部 |
| 菅 村 玄 二 | 関西大学文学部 |
| 関 口 理久子 | 関西大学社会学部 |

Is Empathy Possible?; An Overview of Empathy Symposium 2012, Kansai University

Masashi KUSHIZAKI (Faculty of Letters, Kansai University)
Toshihiko AMEMIYA (Faculty of Sociology, Kansai University)
Tatsuya OKAMURA (Faculty of Human Science, Bunkyo University)
Takao KOBAYASHI (Faculty of Human Science, Bunkyo University)
Satoshi F. NAKASHIMA (Graduate School of Education, Kyoto University)
Hirokata FUKUSHIMA (Faculty of Sociology, Kansai University)
Genji SUGAMURA (Faculty of Letters, Kansai University)
Rikuko SEKIGUCHI (Faculty of Sociology, Kansai University)

This article reported an overview of a series of lectures and a symposium done as part of “special research project” program at the Graduate School of Psychology, Kansai University in December, 2012. First, the background of this symposium was described. Second, three lectures in this program were summarized. Third, a brief summary of three speeches on “facial expression and empathy”, “cognitive and neural mechanism of empathy”, and “empathetic understanding” was provided and a comment on each speech was offered. Finally, a connotation of empathy was discussed.

Key Words: empathy, facial expression recognition, neural mechanisms, psychotherapy

目次

| | |
|---|----|
| 1. はじめに—シンポジウムの背景— (関口理久子) | 2 |
| 2. プロジェクト特殊研究の概要 | |
| (1) 共感の定義をめぐって (申崎真志) | 2 |
| (2) Empathic Understanding の起源 (岡村達也) | 4 |
| (3) 自伝的記憶と共感 (関口理久子) | 6 |
| 3. シンポジウムの概要 | |
| (1) 顔から心を読む—共感と表情認知— (中嶋智史) | 8 |
| (2) 脳の中の自己と他者—共感を支える認知神経メカニズム— (福島宏器) | 10 |
| (3) 他人の体験を理解するとはどういうことか?—セラピストの共感的理解— (小林孝雄) | 13 |
| (4) 共感の基盤としての身体と感情 (雨宮俊彦) | 15 |
| 4. おわりに—共感とは empathy か?— (菅村玄二) | 17 |

1. はじめに

シンポジウムの背景 (関口理久子)

関西大学大学院心理学研究科では、博士課程前期課程のカリキュラムとして、認知発達専攻と社会心理学専攻の共通科目群の中に、「プロジェクト特殊研究」(講義・2単位)、「プロジェクト研究 (1)、(2)」(実習・各1単位)を配置している。これらの科目群では、教員と院生が毎年テーマを設定し、そのテーマのもとでの研究を推進し、研究を通して学生の問題解決能力を養うことを理念・目的として掲げている。心理学研究科では、このプロジェクト研究を基盤として、平成21年度から平成24年度の4年間に渡り「交流できる研究体制の構築—プロジェクト型共同研究体制の発展を目指して—」という中期行動計画を遂行してきた。この計画では、プロジェクト研究という正規のカリキュラムの運用と、カリキュラム外での千里山心理学セミナー(旧水曜セミナー)をはじめとする教員と院生の研究発表活動、プロジェクト研究主催による講演会やシンポジウムなどが企画され、これらの活動を通して、大学院生達のインターディシプリナリーな、創造的な研究が生まれ、豊かな研究交流ができる高度な専門職業人・研究者の育成が期待されてきた。

平成23年度は、2011年12月5日に、「自己の中の他者・他者の中の自己：忘却と記憶の運動をめぐって」(龍谷大学・松島恵介)という題目の講演会を開催したこの企画は本大学院の共通科目のテーマと連動しており、「プロジェクト研究」で「自己」とい

う問題を掘り下げた。この講義はリレー形式で行われ、「自伝的記憶と自己の形成」(関口理久子)、「無意識的な情報処理からみた自己」(申崎真志)、「身体化された自己」(菅村玄二)というテーマで講義をし、学生もこのテーマで発表を行った。

平成24年度はこの計画の最終年であり、「共感」をテーマにしたプロジェクト特殊研究の講義を集中講義形式で行うとともに、シンポジウムを企画した。プロジェクト特殊研究の講義では、講義担当者(申崎真志・岡村達也・関口理久子)の各専門領域からの共感についての講義を基に院生達による議論が行われた。また、2012年12月8日には、話題提供者(中嶋智史・福島宏器・小林孝雄)と指定討論者(岡村達也・申崎真志・雨宮俊彦)により「共感とは可能か?」というタイトルでシンポジウムが行われた。

本稿では、以上のような経緯で行われた講義とシンポジウムの概要をまとめた。

2. プロジェクト特殊研究の概要

共感の定義をめぐって (申崎真志)

ひとことで共感といっても、その定義は研究者によって多様である。

動物行動学のフランス・ドゥ・ヴァール(de Waal, 2012)は、共感のロシア人形モデル(Russian doll model)を提唱した。彼は共感の核に、情動伝染(emotional contagion)や表情・動作の模倣(motor mimicry)といった知覚—運動メカニズム(perception action mechanism: PAM)を据える。ド

ウ・ヴァールは、チンパンジー同士であくびの伝染 (yawn contagion) が生じること (Campbell et al., 2011) などから、ヒトのもつ同情的配慮 (sympathetic concern) や視点取得 (perspective taking) もその延長にあると考えた。これは、共感を広くとらえたモデルといえる。

一方、社会心理学のダニエル・バトソン (Batson, 2011, 2012) は、共感-利他性仮説 (empathy altruism hypothesis) を提案した。彼のいう共感的配慮 (empathic concern) は「援助を必要としているある他者の福利についての知覚によって引き起こされ、それと適合している他者指向的な感情」と定義される。つまり、バトソンの共感的配慮は「他者の福利を増すという最終目標を伴う動機づけの状態」(利他性)を必ず作り出す。そうでない感情を、彼は共感と呼ばない。これは、かなり限定された感情といえる。

ちなみにバトソンの共感的配慮には、情動伝染や動作の模倣も含まれない。友人を気の毒に思うために、「自分も傷ついたり怖がったりする必要はない」というわけだ。またバトソンは、たんなる同情や視点取得も共感的配慮とみなさない。他者の視点を採用しても、他者の福利に価値を置かなかつたり、他者に対して冷静な指向をもった場合には、「わずかの共感しか感じない」という^{注1)}。バトソンはあくまで利他的な動機を重視するので、たんに援助行動をすればよいとも考えない。

臨床心理学のカール・ロジャーズも、共感的理解 (empathic understanding) をカウンセリングの条件に入れている。ロジャーズは、自分の外的照合枠を脇にやって、クライアントの内的照合枠 (internal frame of reference) に身を置くこと [クライアント

の内的照合枠をもつこと] を共感的理解と呼んだ (Rogers, 1951)。重要な点は、ロジャーズは共感の定義を考えたのではなく、カウンセラーの態度を説明するために、共感的理解という語をあてたことである^{注2)} (岡村, 2012)。したがって、ロジャーズの共感もやや限定された用法と考えるのがいいだろう。あえて現在の認知神経科学にひきつけていうなら、視点取得や認知的共感 (cognitive empathy) に近いかもしれない。

私たちはなぜ、利他的行動 (altruistic behavior) [自分のコストを払って相手の利得を上げること] をするのだろうか。話題を協力あるいは利他的行動まで広げると、さらに多くの見解がある。社会心理学のロバート・チャルディーニ (Cialdini et al., 1987) は、否定的状態緩和 (negative state relief) モデルを主張した。人は、[情動伝染によって生じた] 自分の不快な状態を低減させるために (利己的動機)、利他的行動を行うという仮説である。チャルディーニの実験では、援助の必要性を感じても、気分の高揚を操作した群では、援助を引き受ける割合が少なかった。これは共感-利他性仮説の結果と対立するため、バトソンと論争になった (Batson et al., 1989)。

もうひとつの利己的動機として、ロバート・トリヴァース (Robert Trivers, 1971) の互惠的利他主義 (reciprocal altruism) があげられる。人は、相手からのお返しを期待して、利他的行動を行うというものである。ここで重要になってくるのは、相手がきちんとお返しをしてくれる人物かどうかを見分けることだ。レーダ・コスミデス (Cosmides, 1989) は、私たちには裏切り者検知 (cheater detection) のシステムがあるという。実際、人は裏切り者の顔を記憶しやすいことが見いだされている (Yamagishi et al., 2003)。

注1) たしかに視点取得はできても、人の痛みを感じられない場合もありうる。詐欺師やサイコパスがそうだろう。リアンス・ヤングら (Young et al., 2012) によると、サイコパス群は非サイコパス群に比べて、相手を意図せず偶発的に傷つけた場合、それを悪くないと [許容的に] 判断する傾向がある。サイコパスに欠けているのは、意図的に傷つけることの善悪の判断ではなく、被害者の感情体験を直感的にくみとる能力と考えられる。サイモン・バロン=コーエン (Baron Cohen, 2012) も、サイコパスの認知的共感損なわれておらず、情動的共感が低下していると考えている [逆に、アスペルガー障害の認知的共感損なわれているが、情動的共感損なわれていないという]。

注2) ロジャーズの共感的理解は、「あたかも自分自身の体験であるかのように」(as if) 感じ取ることをいう。小林 (2012) は、自分の過去の体験も「かのように」体験されることを指摘し、自分や他人の私的体験に伴う「ありありさ」を共感的理解の鍵と考えている。バロン=コーエン (Baron Cohen, 2012) は共感を、「自己と他者に」注意を二重に向けること (double minded focus of attention) と説明する。私たちの自己意識はすべて「かのような」ものかもしれない (それに「ありありさ」を伴わせている)。このような立場は、神経科学からみた意識論につながり興味深い (たとえば Eagleman, 2011)。

また私たちは、お返しを期待できない相手を助けることも多い(間接互惠 indirect reciprocity)。これについて進化心理学では、よい評判 (reputation) を得ることによって、別の人からの援助を期待できると説明する。実際、マンフレート・ミリンスキーら (Milinski et al., 2006) は、公共財ゲーム (public goods game) において、貢献額が公開される〔見られている〕条件で金額が上がること、公共財ゲームで協力しなかった人は次の間接互惠ゲームで信頼されないことを報告した^{注3)}。

このように、共感や利他的行動をどう定義するかは、さまざまな立場がある。私たちは、見知らぬ人をとっさに助けようとする側面もあるし、人助けで自分の利得を得ている側面もある。共感しやすい性質も共感しにくい性質も、もちあわせているのだろう(串崎, 2013)。共感や利他的行動について、研究を広く見渡すことは、人間の多様な理解につながると思われる。

Empathic Understanding の起源 (岡村達也)

I

1940年12月11日、Rogers, C. R. は Psi Chi^{注4)} で、「Newer Concepts in Psychotherapy」の口演を行った。これが第1の主著『カウンセリングと心理療法』(Rogers, 1942) の第2章“Old and New Viewpoints in Counseling and Psychotherapy”となり、この日がクライアント中心療法の誕生日となった(Rogers, 1974)。

8年後、1948年9月4日、またしても Psi Chi で口演を行い、①その口演は同年10月25日、*Journal of Consulting Psychology* に受稿され、翌年4月に出版され(Rogers, 1949)、②さらに改訂・拡張されて、第2の主著『クライアント中心療法』(Rogers, 1951) 第2章の“The Attitude and Orientation of the Counselor”となった。

第1の主著では「使用しなかった」(Raskin, 2001, p.1) **empathy** が登場する。それだけではない。1949

注3) 視線〔見られている状態〕が協力を促すことは、メリッサ・ベイトソンら (Bateson et al., 2006) をはじめ多くの研究が支持している。また、特定の表情が援助行動を喚起することも十分に考えられる。たとえば嶺本ら (2010) は、悲しみの表情が注意を惹きつけ、世話行動を生じさせるシグナルと考えている。

注4) <http://www.psichi.org/>

年論文には登場しない **empathic understanding** が登場する。

「Rogers 理論の a radical purist」(Bozarth, 2011, p.iii) Brodley (Moon, Witty, Grant & Rice, 2011) が終生依拠した Rogers の3つの論文の内の一である。他の二が必要十分条件論文 (Rogers, 1957) と1959年論文 (Rogers, 1959) であることは言うまでもない^{注5)}。

Menninger (1959) は、Freud (1937) の『終わりある分析と終わらなき分析』をして、「この論文を少なくとも毎年読むこと。それは精神分析実務家にとって、ほとんど宗教的義務である。よって、自分の仕事に相応しい謙遜を養われたし」(p. 177) と言うが、同章も同断である。

第2の主著には第1の主著には登場しない **empathy, empathic understanding** が登場すると記したが、Rogers (1975) が四半世紀後、“Empathic: An Unappreciated Way of Being”を記さなければならなかった所以もまたここにある。そのタイトルはあまりにも意味深長である。「共感的—真価の理解されていないありよう—」。四半世紀経ってなお、Rogers は、**empathy, empathic understanding** の真価が理解されていないと観じていた、ということである。

なお、同論文に関する小林論考 (2010) を私たちはもはや無視して通りすぎることはできない。ぜひ当たっていただきたい。

II

第2の主著、第2章、第5節のことである。1949年論文における同節のタイトルは“A Formulation of the Counselor's Role”であるのに対して、“Some Formulations of the Counselor's Role”となった^{注6)}。

注5) この3つが Rogers / クライアント中心療法の基礎文献であることは銘記に値する。

注6) いずれにせよ、「カウンセラーの役割の定式化」というタイトルである点、Lee, Rountree, & McMahon (2005) の議論を肯定する。曰く、「Kohut の empathy 概念の出立点は患者の経験である。…… Rogers …… は、empathy はなにより心理療法家の能力とした」(p.15)。また、「Rogers の empathy 概念が Kohut とはつきり異なるのは、Kohut が、empathy は心理療法家の〔経験の〕質のことでなく、患者の経験であるとしたことである」(p.30) と言う。「心理療法家の〔経験の〕質」と言えば、これまた、必要十分条件論文

後者において取り上げられるのは、前者中の表現を使えば、次の3つである。

- (1) 受動的／消極的でレッセフェールの態度
- (2) クライアントの情動化された態度の明確化・客観化
- (3) クライアントの内的照合枠に身を置くこと (p.86)

(1)(2)は、前者では、簡潔に挙示されるのみなのに対して、後者では、これらについてもパラグラフが費やされる。(1)(2)はいずれも退けられ、半可通のクライアント中心療法理解に対して鉄槌が下される、と言ってもいい。

(3)を取り上げ始める最初の同節第9パラグラフは決定的である。

クライアント中心療法の現段階の思考において、

- 最も満足の行く治療関係において生起する事柄
- ベースとなる仮説が遂行される仕方

を記述しようとするもう1つ [=第3の] の試みがある。

この定式化をことばにしてみよう。カウンセラーの機能は以下のごとし。

- ①可能な限りクライアントの内的照合枠に身を置くこと
- ②クライアントが世界を見るのと同じように、世界を知覚すること
- ③クライアントが自分自身を見るのと同じように、クライアントを知覚すること
- ④その間、外的照合枠からの全知覚を脇に置いておく (lay aside) こと^{注7)}
- ⑤そして、この、クライアントに対する **empathic understanding** をなにかしらコミュニケーションすること (p.29)

(Rogers, 1957)における定式化は確かにそうである。だが、内実に関して言えば大ボケと思う、と記しておくことにする。Rogersはむしろ、クライアントの経験によって理論を構成していると思える(例えば「自己」の概念。Rogers, 1959, pp.200-203)。概念構成の論理ないし歴史と、概念記述の論理ないし順序とは異なる。だが、“クライアント中心”を誤解しているクライアント中心療法のシンパないし獅子身中の虫には(cf. 岡村、1999)、痛烈でよい。

第1に、定式化そのものに関して、特に①～④において、この第3の定式化は、ズバリ第2の定式化の放棄そのものである。

第2に、**empathic understanding**が初めて登場する場所である。⑤、そして、⑤のみが、1949年論文における本定式化相当箇所に対する唯一の拡張である。

第3に、⑤にはもう1つ重要な意義がある。「コミュニケーションすること」が、そのことばをもって明示されていることである。**empathic understanding**が達成できたとしても、理解した(という)ことがコミュニケーションされなければ、相手にとっては、理解されたことにはならない(岡村、1999, p.88)。当たり前のことである。その点において、第1の定式化の放棄そのものにもなっている。この「コミュニケーションすること」においてカウンセラーは、「受動的／消極的な役割、傾聴する役割」のみではありえない。大いなる能動性／積極性が要請される。

以上、第2の主著において、1949年論文に付加された⑤には重要な意義がある、ということである。そもそもの第3の定式化によって第2の定式化が否定されているとともに、⑤によって、これに端的な名称 **empathic understanding** が与えられるとともに、第1の定式化も否定されている、ということである。

第1の定式化は、態度においては尊重に悖らないとしても、機能においては尊重をコミュニケーションしえぬ可能性があるがゆえに、放棄された。第2の定式化は、態度においても機能においても、尊重に悖りうる可能性があるがゆえに、放棄された。第3の定式化は、第2の定式化に対しては、態度においても機能においてもこれを否定し、第1の定式化に対しては、より“能動的／積極的”に態度を定式化し、その“受動的／消極的”な態度を否定している。

注7) Spinelli (2005)は、現象学的方法論の第1則をエポケーとし、「物事に関するわれわれの当初のバイアスや偏見を脇に置いておくこと (put aside)、期待や想定を保留すること、要するに、それらすべてを能う限り一時的に括弧に入れること、そして、われわれの経験のそのときの直接のデータに焦点を当てることができるようにすること」(p.20)と述べ、「パーソン中心療法は現象学的方法論の再述である」(pp.172-174)とさえる。

III

この命名に関して、Kirschenbaum (1979, 2007) による Rogers 伝の注は興味深い。
まず、1979年の注。

Rogers 後の著者らは、[empathy の形容詞形の] ヴァリエーション、empathetic をよく使用した。[が、] Rogers が使用したのは、“**empathic**” “**empathically**” だけである。[だが、] これが植字工にはしばしば悩みの種となった。公刊物において一再ならず、Rogers は “**emphatic listening** (強制的傾聴)” の支持者として出現する！ (p.165)

次に、2007年の注。

empathic は当時一般には広く使用されていなかったため、校正係や植字工の中にはこれをミスと見なし、“**emphatic**” ということばに置き換えた者がいた。[また、] Rogers は決して “**empathetic**” ということばは使用しなかったが、後者の方が、その後、一般に使用されるようになった (p.626)。

最後に、これらの注の置かれた本文。1979年も2007年も変わらない。

クライアントの内的照合枠を採択すること……そのプロセスを記述するために、Rogers は “**empathy**” ということばを使用し始めた。言うまでもなく、Rogers の造語ではない。心理療法では、長年にわたり、一般的なことばだった。Rogers は、自分の意図の伝達にはこのことばが適切としたにすぎない。が、結果として、このことばを広く一般化することとなった。Rogers は、“**理解**” ということばに代えて、“**empathy**” “**empathic**” を使用し始めたのだった (1979, p.165; 2007, p.160)。

“**理解**” がポイントであり、それが「内的照合枠に身を置くこと」とされ、これに **empathy** ということばが適切とされた、ということである。Rogers にあっては、non-directive と言っても、client-centered と言っても、同じ事態が指示されているのと同じように (岡村, 1999, p.21)、Rogers にあっては、“**理解**” と言っても、**empathy** と言っても、同じ事態が指示されている、ということである。**empathic**

understanding は冗語^{注8)}ということになる。あるいは、“**理解**” の様相の積極的明示となる (岡村, 1999, p.44)。が、「内的照合枠に身を置くこと」とされた“**理解**” すなわち **empathy** がいかにして可能かは、依然問題のままである。

IV

シンポジウム「共感とは可能か?」は、そのタイトルからして、それがいかにして可能なのか、その「妥当性ないし真理性という論理的な特徴の保証」、ないし、その「正当化ないし根拠づけ」という権利問題 (湯浅, 1998) をめぐって営まれた、と考える。

自伝的記憶と共感 (関口理久子)

本稿では、自伝的記憶研究の見地から共感について論じる。まず、自己の形成と自伝的記憶の関連について、次に、自伝的記憶と共感の神経基盤の共通性について、最後に、自伝的記憶の社会的機能と共感についての研究を概説する。

自伝的記憶と自己の形成

自伝的記憶 (autobiographical memory) とは自分自身についての記憶であり、自己についての知識などの意味記憶的な側面と、特定の時期や場所で個人の過去に起こった出来事や事件についての記憶であるエピソード記憶的側面を持った記憶である。自伝的記憶のこのような特徴から、特定の時期や場所で個人の過去に起こった出来事や事件についての記憶は自伝的エピソード記憶、また、自己に関する事実は自伝的事実 (自伝的知識) として区別されている (Conway, 1990; Conway & Pleydell Pearce, 2000; Cabeza & St Jacques, 2007)。

Conway (2005) は、自己記憶システム (The Self Memory System, SMS) という概念的なモデルを提唱している。SMS は、自己と記憶が相互に結びついていることを強調した概念的モデルであり、自伝的エピソード記憶から自伝的知識への組織化を表したモデルである。SMS は階層的で入れ子構造になっており、特異的 (specific) な1度きりの体験から、繰り返しのある一般的 (general) な出来事、人生の期

注8) 『広辞苑 第6版』によれば、「論理的には不必要な語を付け足して用いる表現。強調などの修辭的効果のため故意に用いる。」

間（子供時代、学生時代など）やテーマごとの意味記憶のまとまりを形成し「概念的な自己」が形成される。

自伝的エピソード記憶の想起時期については、10代後半から20代後半までの記憶が最もよく覚えているというレミニセンス・バンプ (reminiscence bump) が報告され (Rubin, Wetzler & Nebes, 1986)、5カ国で調べても同様のレミニセンス・バンプが見られたことから文化的にも共通であることが知られている (Conway, Wang, Hanyu, Haque, 2005)。Rathbone, Moulin & Conway (2006) は、“I am statements”を用いて自己イメージを生成させ、その“I am”イメージより生成した記憶の記憶年齢の分布を調べている。この方法では、まず、10個の「I am …」文に、「自分自身を表すような言葉 (defined the identity)」を記述し、文を完成させる。次に、10個のうち、自分にとって最も重要で、エピソードを思い出せる3個の文を選択し、エピソードを再生し、何歳の時のエピソードかを回答する。この研究の結果、中心になる“I am statements”の生じた時期にその特徴に関わる出来事も集中することが示されている。つまり、10代後半から20代後半にレミニセンス・バンプが見られるのは、その時期に永続的で不変な自己の形成がされるからであるとしている。

自己概念と自伝的記憶の研究では、肯定的な自己概念を維持するために肯定的な出来事の方が否定的出来事より多く再生されるというポジティブ・バイアス (positive bias) が報告されている (Byrne, Hyman, Jr. & Scott, 2001; D'Argenbeau & Van der Linden, 2008; 関口, 2012a)。また、自尊心の高い人と低い人を比較すると、自伝的記憶の主観的想起特性 (再現感、知覚的詳細さなど) に差が見られ、自尊心の高い人は肯定的な自伝的記憶が詳細になるが、否定的な自伝的記憶は詳細に想起しないことが示されている (D'Argenbeau & Van der Linden, 2008; 関口, 2012b)。以上のような研究から、自己の形成には自伝的記憶のシステムが不可欠であることが示されている。

自伝的記憶と共感の神経基盤の共通性

共感の基盤となるのはまず自己と他者の区別であり、次に他者の心的状態を推測することである。自己の形成に自伝的記憶システムが不可欠であるのならば、共感の際に活動する神経ネットワークの一部

に自伝的記憶の神経基盤が含まれる、あるいは、共感と自伝的記憶で共通の部位が活動していると考えられる。また、他者の心的状態を推測することは、自分の心的状態とは異なる心的状態を思い浮かべるということであり、これは、例えば、過去や未来のある時点で自分がどう考えていた (考えるだろう) か、どう感じていた (どう感じるだろう) かを思い浮かべる際の心的活動と類似しているとも考えられる。

神経画像法による研究から、自伝的記憶機能は、記憶機能に関与する領域としての海馬を含む側頭葉内側部だけでなく、扁桃体や前頭前野に関連しているとされてきた (詳しくは関口, 2005)。Cabeza & St Jacques (2007) は、それまでの神経画像法による研究をまとめ、自伝的記憶の神経基盤として主要な領域として、海馬、後膨大皮質、後頭葉の楔部と前楔部領域、左外側前頭前野、内側前頭前野、そして、腹内側前頭前野の6領域があるとしている。自伝的記憶の想起では、記憶手がかりにより記憶検索過程 (左外側前頭前野) は、自己参照過程 (内側前頭前野) と相互作用しながら、時空間に定位された特定の出来事の想起となる。想起 (海馬と後膨大皮質) は、扁桃体での情動処理および視覚的イメージ (後頭葉の楔部と前楔部領域) により強められる。また自伝的記憶の内容は、もっともらしさ (Feeling of rightness, FOR) のモニタリングシステム (腹内側前頭前野) でモニターされる (Cabeza & St Jacques, 2007)。

共感の神経基盤については本稿では詳しく述べないが、他者の心的状態の推測の際に関与する神経領域は、自伝的記憶の際に関与する神経領域 (内側前頭前野) と同じであり (Mitchell, 2009)、共感の認知的な側面に関与する神経ネットワークは、自伝的記憶の想起時に活動する領域 (側頭葉内側部と内側前頭前野) と共通であることも指摘されている (Shamay Tsoury, 2011)。

自伝的記憶の社会的機能と共感

自伝的記憶を語ることは、親密さを生み出しそれを維持する機能、他者へ助言や情報を伝える機能、他者から共感を引き出したり他者へ共感する機能などの社会的機能を持つといわれている (Alea & Bluck, 2003)。確かに、友人や配偶者などが自分の体験を詳しく語るのを聞いたことで、その人により

親密になったり、その人に共感したり、似たような体験を語り合うことで助言や情報を与えたりすることは日常生活でよく起こることである。

自伝的記憶の共有は、他者に共感するのに効果的である。例えば、痛みについての自伝的記憶を思い出させると、思い出さなかった人に比べて、慢性的な痛みを持つとされる人への共感が増すことが示されている (Bluck, Baron, Ainsworth, Gesselman & Gold, 2012)。このような研究では、話し手の個人特性、共感する聞き手の個人特性、自伝的記憶の内容(つらい体験や楽しい体験など)、感情喚起の程度との関係など検討するべき点は多いとは思われるが、自伝的記憶の共有という日常我々がよく行う行為が共感を増加させる効果を持つことを示した点は意義があると考えられる。

3. シンポジウムの講演概要

顔から心を読む—共感と表情認知— (中嶋智史)

私達は、他者の表情からその人物の感情状態や意図を読むことができる。また、他者の表情を見るだけで、自分自身もその人物と同じような感情状態を経験することがある。例えば、ホラー映画などにおいて、登場人物が化け物に襲われているシーンを観た時に、恐怖の対象(化け物)そのものだけではなく、襲われている人物の表情を見ることでも恐怖を感じる。また、登場人物が恋人や親兄弟などの大切な人を失って泣いている表情を見るだけで、自分自身も悲しい気持ちになるかもしれない。時には、その人物に対して何かしてあげたいと感じることもあるだろう。こうした現象には、他者の気持ちを理解したり、他者と同じ感情を共有したりする心的機能である共感(empathy)が深く関わっていると考えられる^{注9)}。

本稿では、表情を知覚することを通じて他者と感情を共有するメカニズムについて概観する。はじめに、古典的な表情認知研究とその枠組みについて述べる。次に、表情認知における共感システムの役割について、主に感情的、運動的側面から検討した研

注9) 共感の定義には様々なものがあり、狭義には「共感的配慮」のような他者志向的な感情を指すが、本稿では、情動伝染や模倣などの知覚—運動メカニズムを含む広義での共感を取り扱う。

究を紹介する。最後に、今後の課題と展望について述べる。

古典的な表情認知研究

表情にかんする最も初期の研究として Darwin (1872) が挙げられる。Darwin は、種々の動物において感情的表出が見られること、西洋から隔絶された文化圏においても西洋文化圏と共通した表情が見られることなどから、表情表出は人類に普遍的な機能であると考えた。この思想を受け継いだ Ekman (1972) は、基本感情理論 (basic emotion theory)^{注10)} を提唱し、喜び、怒り、悲しみ、嫌悪、恐怖、驚きなどの基本感情には、独自の神経基盤が存在し、表情、声、ジェスチャーなどの信号 (signal) として表出されると考えた。Ekman et al. (1987) は、様々な文化圏において表情認知のあり方を検討し、いずれの文化圏に属する人でも共通して認識できる6つの表情(怒り、喜び、悲しみ、嫌悪、恐怖、驚き)を見出し^{注11)}、これらを「基本表情」と名付けた。また、Ekman and Friesen (1976) は、表情筋の動きの組み合わせから表情を解釈するシステム (FACS: Facial Action Coding System) を構築しており、このシステムは、表情表出を測定するための客観的な指標として広く用いられている。

Ekman らの理論に基づいた「古典的」な表情認知研究の骨子は、他者の感情を、通文化的な規則に基づいて、顔の筋肉の動きのパターンから読み取ることができるという点にある。こうした表情認知研究の主要な関心は、我々がどのようにして表情を視覚的に読み取り解釈するか、すなわち表情の“認知的”処理に置かれていたと言えるだろう。

注10) emotion に対応する日本語の訳としては、「感情」、「情動」、「情緒」などがあり、研究者によってその分類・定義は様々であるが、本稿では感情的経験に関わる包括的な用語として「感情」を割り当てることとした。

注11) ただし、表情カテゴリが通文化的に認知されるという Ekman らの主張については、用いられた手法に問題があるという批判 (Russell, 1994) や、どの表情を基本表情とするかが研究者間で一致していないという批判 (遠藤, 1996)、fMRI などを用いた認知神経科学的研究において、それぞれの感情に対応した神経基盤が同定されていないという批判 (Barrett & Wager, 2006) などがあり、現在でも論争が続いている (詳細は、Barrett (2006) を参照のこと)。

表情認知の情動的側面：感情伝染と表情模倣

冒頭で述べたように、我々は他者の表情を見て、対象人物の感情を理解するだけではなく、その人物の感情を自らも経験することがある。表情、声、動作などのシグナルにより当該人物の感情を知覚することを通じて、表出者と観察者の感情が同調する現象のことを感情伝染 (emotional contagion) とよぶ。他者の表情を知覚すると、当該表情カテゴリと一致する感情を、観察者自身も経験することが多くの研究によって示されている。例えば、観察者は他者の喜び表情を見た時には自らも喜びを経験したと報告し、悲しみ表情を見た時には自らも悲しみを経験したと報告する (e.g. Wild, Erb, & Bartels, 2001)。

ただし、主観的な経験を報告させるだけでは、観察者が本当にそうした感情を経験しているのか、呈示された表情カテゴリの情報に観察者の回答が誘導されているのかが区別できない。そこで、現在では、主観評定に加えて、SCR (皮膚伝導反応)、ERP (事象関連電位) などの生理指標や、fMRI (機能的磁気共鳴画像法)、MEG (脳磁図) などの脳機能イメージングを用いてより客観的な測定が行われている。こうした検討を通じ、例えば、恐怖の学習と強く関わる脳部位である扁桃体 (amygdala) が他者の恐怖表情を観察する際にも活動すること (Morris et al., 1996)、嫌悪を感じたときに活動する脳部位である島皮質 (insula) および前頭弁蓋 (frontal operculum) が他者の嫌悪表情を観察する際にも活動すること (Wicker et al., 2003)、自身が痛みを経験した時に活動する脳部位である前部帯状回 (ACC) と島皮質が、他者の痛みの表情を認知する際にも活動すること (Botvinick et al., 2005; Simon, Craig, Miltner, & Rainville, 2006) などが報告され、観察者が、実際に、表情表出人物と同様の感情を経験しているという客観的な証拠になっている。

こうした研究から、表情認知には、Ekman らの言うような、他者の表情を筋肉の動きによってカテゴリに区別し、意味を理解するという過程だけでなく、他者と同じ感情を自動的に喚起されることによって、相手と感情を共有する過程も関わっているのではないかと考えられるようになってきた。例えば、扁桃体を損傷し、恐怖の感情を感じなくなったウルバハ・ビーテ病 (Urbach Wiethe disease) の患者は、恐怖表情の認知ができなかったと報告されている (Adolphs, Tranel, Damasio, & Damasio, 1994)。こ

れは、観察者の感情経験が表情認知に重要な役割を果たしていることを示している。また、観察者にはその表情を見たという意識がない場合、すなわち筋肉の動きによる表情のカテゴリ化が不可能な場合でも、感情伝染が生じるという知見からもこれは支持される。例えば、Whalen et al. (1998) によって、閾下で呈示した恐怖表情に対しても扁桃体の活動が見られることが示されている。

また、感情伝染に深く関わる現象として、表情模倣 (facial mimicry) という現象がある。これは、他者の表情を認知した際に、観察者の表情が相手の表情と同調して動く現象である。例えば、喜び表情の形成には、主に目尻を下げる筋肉である眼輪筋や、口角を上げる筋肉である大頬骨筋が関わっているが、喜び表情の人物の顔を観察することにより、観察者自身の眼輪筋や大頬骨筋も動くことが知られている (e.g. Dimberg, 1982)。表情模倣は、表情が閾下で呈示された場合であっても生じることから、自動的な過程であることが示唆されている (Dimberg, Thunberg, & Elmehed, 2000)。

さらに、表情模倣は、他者と感情を共有する上で重要な意義を持っている (Niedenthal, 2007)。観察者は自分自身の筋肉の動きを参照することによって、相手の表情の意味を理解したり、相手に対する共感の感情を経験したりする (embodied cognition: 身体化された認知)^{注12)}。この主張を裏付ける研究として、顔面筋の動きを阻害することによって、表情認知の成績が低下することが挙げられる (Neal & Chartrand, 2011; Oberman, Winkielman, & Ramachandran, 2007)^{注13)}。また、対人相互作用の障害を抱える自閉症の参加者では、他者の表情を観察する際に、健常者では生じる自動的な表情模倣が生じないことが知

注 12) 他者の心的状態を推測する際に、他者の行動や環境から推測を行うという従来の認知的なモデルを Theory-Theory と呼ぶのに対し、このように自己の行為や感情状態からシミュレーションすることによって推測を行うモデルのことを Simulation Theory と呼ぶ (Goldman & Sripada, 2000)

注 13) 例えば、Neal and Chartrand (2011) は、美容外科クリニックにボトックス注射を受けにきた患者を対象に表情認知課題を実施した。ボトックス注射とは、顔面筋の動きを阻害することにより、シワを改善する治療法である。ボトックス注射を受けた患者では、他の注射施術を受けた患者と比べ、表情認知成績が低下していた。

られている (McIntosh, Reichmann Decker, Winkielman, & Wilbarger, 2006)。一方で、顔面表情筋麻痺を生じる先天性の障害であるメビウス症候群 (Moebius syndrome) の患者でも、表情認知が正常に保たれていること (Bogart & Matsumoto, 2010) や、健常者において、表情模倣の強さと表情認知の正確さの間に相関が見られないこと (Hess & Blairy, 2001) など、矛盾する結果もあり、表情模倣が表情認知に不可欠であるかについては今なお議論が続いている (Bastiaansen, Thioux, & Keysers, 2009)。

このように、現在の主要な表情認知研究においては、観察者自身の表情筋の動きの情報やそれに基づく感情経験が表情認知に影響すると考えられている。ただし、表情模倣と表情認知の関連については、今後のさらなる検討が必要であろう。

表情認知と向社会的反応の研究

他者の表情を認知し、自らも相手の感情を共有することは、実際にどのような行動につながるのだろうか。悲しみ表情や、恐怖表情、痛み表情は、表出者にとって何らかの問題が生じていることを示すシグナルであり、他者の向社会的行動を引き出すと言われている。実際、チャリティー広告において、子供が喜び表情や真顔を示している時に比べ、悲しみ表情の場合に、募金額が増えることが示されている (Small & Verrochi, 2009)。また、評定実験においても、悲しみ表情および恐怖表情の人物は、怒り表情や真顔の人物に比べて、他者からの援助が得られやすいだろうと評価される (Marsh & Ambady, 2007)。一方、悲しみ表情と恐怖表情では、観察者から引き出せる援助行動に違いがあるという報告もある (Nakashima et al., 2009; 嶺本・中嶋・吉川, 2010)。例えば、Nakashima et al. (2009) は、悲しみ表情は、恐怖表情と比べて、実際の援助を効率的に引き出す機能を備えていることを示唆している。

課題と今後の展望：文脈の効果

ここまでで挙げてきた研究も含め、従来の表情認知研究では、表情の表出された文脈の影響についてはほとんど検討されてこなかった。しかしながら、確かに我々は他者の表情を見るだけで感情を推測できるものの、いきなり悲しい映画のラストシーンの人物の表情だけを見せられる時と、それまでの話の流れを知ってその表情を見せられる時では、その人

物への共感の程度には違いがあるだろう。

実際、環境的文脈や社会的文脈によって、表情の認知が異なることが示されつつある。例えば、環境的な文脈を操作した研究からは、暗闇下では照明下よりも怒り表情がよりネガティブに認知されること (中嶋・森本・吉川, 2009) や、悪臭をかぐと、嫌悪表情の判断が素早くなること (Leppänen & Hietanen, 2003) などが示されている。また、社会的文脈を操作した研究からは、対象が観察者と同じ人種であるときには喜び表情が、異なる人種であるときには怒り表情がそれぞれ素早く判断されること (Hugenberg, 2005) や、社会的排斥を受けると、受容されている時と比べて、悲しみ表情の他者に対する好ましき評定が低下し、共感できなくなること (布井ら, 2012) などが示されている。加えて、観察者の感情状態や態度、観察者と対象の関係性などが、表情模倣の生起に影響するという報告もある。例えば、観察者が対象に対してポジティブな感情を抱いている時には模倣が生じやすいのに対して、ネガティブな感情を抱いている時には模倣が生じにくいことが示されている (Likowski, Mu, Seibt, Pauli, & Weyers, 2008)。

これらの研究から、共感的反応は、前後の文脈やその対象との関係性の認知を通じて生じることが示唆される。今後の表情認知研究では、こうした文脈の効果もふまえた検討が必要となるだろう。

脳の中の自己と他者

—共感を支える認知神経メカニズム— (福島宏器)

共感 (empathy) という語の定義は研究者によって様々である。同情 (sympathy)、感情移入、視点取得、心の理論、メンタライジングなど、関連する語も多く、混乱されがちである。本稿では、近年の生物学的検討 (認知神経科学や動物行動学など) において比較的共有されている定義として、「他者の経験 (感覚・感情・心理状態等) を共有・もしくは理解すること」という定義を採用する (Preston & de Waal, 2002 も参照)。

本稿では、「共感は可能か」という問いについて、認知神経科学の立場から考察する。以下、(1) 共感の神経メカニズムの基礎、(2) 共感の変化・変動について、(3) 自分の感情と他者への共感の関連、についての知見を概観する。

1. 共感の神経的メカニズムの基礎

現在の認知神経科学においては、共感および他者理解に関わる脳の一般的な特性が知られている。すなわち、他者のある経験を認識すると、脳内において、自分がその経験をしているときと同じような脳活動パターンが生じる。この知見は、「脳内における自己と他者の共通表現」と表現される (Decety & Lamm, 2006)。

脳内における自他の共通表現に関する研究は、1990年代前半におけるミラーニューロンの発見によって幕を開けた。ミラーニューロンとは、自己が特定の運動を行ったときのみならず、他者が同じ運動を行なっているところを観察した場合にも活動するニューロンであり、マカクザルの運動前野で発見された (Di Pellegrino et al. 1992; Rizzolatti et al. 1996)。その後、ヒトの脳内でも視覚野と運動野を結ぶ経路上の複数の領域で同様の特性を持つ活動が発見された (Iacoboni et al. 1999 など)。この「ミラーニューロン・ネットワーク」が、他者の運動を自動的、あるいは予測的に理解することを可能としていると考えられている (Rizzolatti et al., 2006)。

2000年代に入り、ミラーニューロンのような自他の共通表現の特性は、運動のみならず、触覚や、味覚、嗅覚などにおける感情的経験など、様々な経験においても見出されはじめた (e.g. Keysers et al., 2004; Wickers et al., 2003)。それらの研究のなかでも、「共感」という文脈の研究において特に頻繁に扱われる題材は、他者の「痛み」に対する心理的・生理的反応 (“empathy for pain”) である。この研究の典型的な実験パラダイムでは、実験参加者は、たとえば他者の身体的な痛みを表す映像 (他人の身体に注射針が挿入される様子など) を観測するか、あるいは教示や記号などによって他人の身体に痛み刺激が与えられていることを認識する。このようにして他者の痛みを認識するときに、観察者自身が痛みを受けた場合と相同する身体的・神経的反応が生じることが、多くの研究により示されてきた (Avenanti et al. 2005; Singer et al. 2004; Jackson et al. 2005)。ちなみにこうした実験において、他者が痛みを受けている様子を具体的に (視覚的に) 観測する場合には、脳の痛覚領域に加えてミラーニューロンネットワークも共起し、一方で、教示などによって抽象的に他者の痛みを喚起される場合には、次に述べるメンタライジング・ネットワークが痛覚領域とともに

活性化するという (Engen & Singer., 2012)。

運動や感覚、痛みのような「身体的な」経験だけでなく、より抽象的な心的状態の表象 (メンタライジング) においても、脳活動においては自己と他者の共通表現という特性が現れる。具体的には、前頭葉と後頭葉の内側部皮質が、他人の意図や信念、あるいは性格などを考える際に活動する。一方で、我々が自分自身の心情や性格について内省したり、過去や未来の出来事をイメージするときにも、ほぼ同じ部位が中核的な役割を果たす (Vogeley et al., 2001; Seger et al. 2005 など。福島, 2011 も参照)。メンタライジング・ネットワークは自己と他者に共通して心象の処理に関わるのである。

これまでの知見をまとめると、我々の脳は、他人の経験を、自分の経験のように処理するメカニズムを備えているとみなせる。「共感は可能か」という問いについては、我々は「共感するようにできている」と言えるだろう。

2. 共感の変化や変動、および個人差について

共感を実現する基礎メカニズムが明らかになってきたところで、2000年代の後半より、共感や他者理解の研究テーマは、より現実場面に即した研究が中心となっている。すなわち、共感の仕方 (強度) が状況や対象によって変動することや、あるいは共感のしやすさの個人差の詳細や原因など、「共感の多様性や変動をもたらすメカニズム」がこれからの重要な研究課題と言える。

共感を反映する脳活動が状況や個人によって変動する例として、empathy for pain を題材にしたいくつもの研究例が報告されている。例えば、共感が認知的評価に左右される例としては、他者が傷つけられる状況を「麻酔が効いていて痛くない」と説明された上で観察すると、主観的な評定においても脳活動においても、痛みの共有反応が有意に低減する (Lamm et al. 2007)。あるいは、日常的に他者の痛みに触れ、これに対処する必要がある医師などは、痛みへの共感反応が低いという。鍼灸師を対象にした実験では、他者に針が刺される映像を見ても、鍼灸師の脳内の痛覚領域がほとんど活動しないことが報告されている (Cheng et al. 2007)。

このような認知の影響や個人差の他に、「他者との関係性」もまた、共感の程度を左右する重要な要因である。たとえば、福島ら (2006; 2009) の研究で

は、他者との「利害関係」が共感に及ぼす影響を検討した。具体的には、自己の行為評価に関わる脳波上の事象関連電位成分である「行為評価電位」、あるいは“MFN” (Medial frontal negativity) を指標として、他者の行為の結果 (成功や失敗、損得) に対する神経表象の特性を研究した例を紹介する。

ある実験では、実験参加者本人と、その友人、およびPCプログラムの各プレイヤーが、数試行を単位として交代しながらギャンブル課題を行う状況で、数種類の他者の損失に対する事象関連電位を調べた。その結果、友人の損得の知覚時に、自分の損失と同じようにMFNが発生することが確認された。一方で、PCプログラムの損得の知覚時には、MFNは有意な発生を示さなかった。またMFNの電位振幅は、被験者の共感性尺度や親密度評定との相関が示された。これらの結果から、MFNは他者の損失の知覚を反映するのみならず、共感的な心的処理を反映している可能性が示唆された (Fukushima & Hiraki, 2009)。

この結果を踏まえ、さらに複雑な社会的文脈における他者の行為評価と共感の関係を調べるために、「他者の損失が自分の利益になる」という対立的な利害関係がからむ状況での脳活動を検討した。ここでは、各試行のプレイヤーが獲得 (損失) した金額は観測者の損失 (獲得) となる、プレイヤー間の利害対立状況を設定した。その結果、MFNの発生の仕方には個人差が明確に観測され、とくに性別による違いが明らかになった。すなわち、利害が対立する相手の損得に対して、女性群はMFNが有意に出現していたのに対し、男性群では消失、あるいは極性が逆方向に出現する傾向が見られた (Fukushima & Hiraki, 2006; 福島, 2009)。

上記でみたような「利害関係」の他に、対象との親しさ (Beckes et al. 2012; Azebedo et al. 2012)、対象への好意 (Singer et al. 2006; Cheng et al. 2010)、対象と自己との相似性 (Xu et al., 2009) などの要因が、共感的な神経活動を変動させる要因として確認されている。

また、上述の研究 (Fukushima & Hiraki, 2006) で示唆されるように、他者にとってのネガティブな事象は、必ずしも観測者にとってもネガティブな反応を引き起こすものではない。共感 (他者の経験の共有、理解) が生じた先に、援助行動や賞賛などの共感的な配慮や行動に移行するとは限らず、逆に、反

共感的なもの (妬みや「ざまあみろ」という感情、他者の不利益になる行動をあえてとるなど) に移行する可能性があるということである (Singer et al. 2006; Takahashi et al. 2009)。また、社会的に忌避される対象 (ホームレスや薬物中毒者など) に対しては共感が生じにくいという非人間化 (de humanization) という現象が知られているが、実際に脳活動をみても、社会的に忌避される対象については共感や心象化に関わる脳活動がほとんど生じないということも報告されている (Harris & Fiske, 2006)。このように、我々は共感をするようにできているのだが、一方で、あえて半共感的な行動を行ったり、あるいは共感をシャットダウンする「能力」も自然に備えていると言える。これらの共感の変化や消失は、日常的にはごくありふれた事象であるが、社会神経科学の観点からは、そのメカニズムも含めて検討が始まったばかりの重要なトピックである。

3. 自分の感情と他者への共感の関連。

前述のように、観察者の経験や対象への認知、あるいは様々な対人関係などの要因が共感を変動させることが明らかになっている。それでは、共感を「促進」させるにはどうすればよいだろうか。基本的には、これらの知見を踏まえた戦略が考えられる。たとえば、対象への親密さ (familiarity) という点から、対象への接触や知識を増加させたり、あるいは意図的に他者の視点を取得することによって、共感を増幅させることが可能であろう。このことは、神経活動の観点からも確認されつつある (Preston et al., 2007; Harris & Fiske, 2007)。

一方で、冒頭に挙げた「自己と他者の共通表現」という神経生理的な基礎メカニズムの観点からも、共感を促進する根本的な一因が考えられる。この神経特性が示唆することは、他者理解 (共感) は自己認識と表裏一体であり連動している、ということである。そこで、自己の感情や、感情の源泉となる身体感覚にたいして敏感になることが、他者への共感を促す要因になるのではないかと考えられる。

この考え方に関連して、筆者らは、自己の身体内部の生理状態 (心拍や胃腸の状態など) の知覚 (身体内部感覚 Interoception) と、他者 (および自己) の感情の処理の間の直接的な関連を調べている。とくに近年は、身体と脳の機能的な連動に関わる脳波を利用した研究をおこなっている。一つの研究では、

心拍に同期した脳波（心拍誘発電位）が、他者の心情や考えを理解する課題を行っている際に、何らかの変動を示すか否かを検討した（Fukushima et al., 2011）。この実験の参加者は、脳波及び心電図を計測されながら、他者の心的状態を推測する課題を行った。この課題の最中の神経生理指標を検討すると、前頭葉において、心拍と同期した脳波（心拍誘発電位）が変化していることが分かった。またこの脳波の変動の大きさは、実験参加者の多次元共感性尺度得点との有意な相関が見られた。これらの結果は、他者の心情を理解するために、脳が自分自身の身体情報を参照しようとしている可能性を示唆していると解釈できる。このような脳と身体の連動が、自己と他者の感情に意識を向けるときにどのように変化するか、さらに研究を重ねる必要がある。

他者への共感は、「自分自身への共感」と表裏一体とみなせるだろう。このことから、他者への共感が変動するメカニズムを、自分自身の感情への距離感が変動する、すなわち没入や脱中心化などの神経メカニズムと合わせて、機能的に検討する道をさらに探ってゆくことが求められている。

他人の体験を理解するとはどういうことか？

—セラピストの共感的理解—（小林孝雄）

1. 「共感的理解」の位置づけ

「共感的理解 empathic understanding」とは、心理療法のアプローチの一つであるクライアント中心療法の創始者、ロジャーズ（Rogers, C. R.）が提唱したセラピストの態度特質である。

ロジャーズは、論文「治療的人格変化の必要十分条件」（Rogers, 1957）において、クライアントに肯定的な人格変化が生じるための6つの必要十分条件を仮説として提示した。この6つの条件のうちの5番目の条件が共感的理解に関する条件で、「5. セラピストは、クライアントの内的照合枠について共感的理解を体験している」と記述されている。

ロジャーズはこの6つの条件を、特定の学派によらずに当てはまるものとして提示しており、また「共感」は他のアプローチ（例えば精神分析的な心理療法）でも重要視されていることから、「共感的理解」とは、学派によらずセラピストの重要な特質と位置づけられていると言ってよい。当のクライアント中心療法では現在、6つの条件のうち、「自己一致」「無条件の肯定的関心」とともに「共感的理解」は「中

核条件」と位置づけられている。

2. 「共感的理解」の定義

ロジャーズ（1957）は、共感的理解を次のように説明している。

クライアントの私的な世界を、あたかも自分自身の私的な世界であるかのように、感じ取ること、しかし、決して「あたかも、かのように（as if）」という特質を失わないままでそうすること—これが共感であり、そしてこれは治療に不可欠のようである。クライアントの怒りや怖れや混乱を、あたかも自分自身のものであるかのように、感じ取ること、しかも、自分自身の怒りや怖れや混乱を、そこに混入させないようにしたままで、そうすること、これが私たちが記述しようとしている条件である。（Rogers, 1957）

この説明から、共感的理解とは、①何を：クライアントの私的な世界を、②どのように：あたかも自分自身の私的な世界であるかのように、③感じ取る、という理解であると言える。それはどのような理解であるのか。順に整理していく。

3. 「私的な世界」とは

ここでいう「私的」とは、「公的」の対語としての「私的」ではない。ただ当の本人のみが知り得るものであって、他人はそれを知ることができない（そもそも他人がそれを「知る」ということがどういうことを意味するのかわからない）という意味での「私的」である。

たとえば、「海が見える」という状況を想定しよう（永井、2006を参考している）。わたし（＝筆者）にとって、「海が見える」とき、海が「このように」見える。「端的に」、「ありありと」見える。

このとき、海が見えることと、わたしの関係はどうなっているのか。永井（2006）によればこうである。

雷鳴が聞こえているとき、海が見えているとき、それを聞いたり見たりしている主体は、存在しない。雷鳴が聞こえているということ、海が見えているということが、存在するだけである。あえて「私」と言うなら、私が雷鳴を聞き、私

が海を見るのではなく、雷鳴が聞こえ、海が見えていること自体が、すなわち私なのである。(p.17)

わたし (=筆者) の私的な世界とは、わたしにとって (わたしに於いて) 「このように」 見え、聞こえ、感じられ、考えられ、思われる、それらのこと自体である。そして、「私的な世界」とはこれらのこと自体なのであって、それはすなわち<わたし>であると言うこともできる。<わたし>は、わたしにとっての「私的な世界」そのものであるのだから、私的な世界の中に<わたし>は登場しない。<わたし>は、世界がそこから開かれてある起点 (限界) として、常に世界を支えている。「私的な世界 = <わたし>」は、ただ<わたし>だけにとって「このように」「端的」なもので、他人は知りようがない。したがって、私も「他人の私的な世界」を知りようがない。

4. 「あたかも自分自身の私的な世界であるかのよう」

ところが、世のセラピストは、この知りようがないはずの「他人の私的な世界」を理解しようとしており、「できている」と思っている。一体何をしているのか？

「このように」「ありあり」と「端的に」感じ取ることができるのは、唯一「私の私的な世界」だけである。つまり、あたかも自分自身の私的な世界であるかのように感じ取ることができるのは、自分自身の私的な世界だけである。

ロジャーズの説明を少し言い換えてみよう。「感じ取っている自分自身の私的な世界を、あたかもクライアントの私的な世界であるかのようにすること」(小林, 2010)。セラピストが実践で行っていることを言い当てるには、むしろこの表現のほうがふさわしいのではないかと。そして、この表現であれば、感じ取るのはあくまでも自分自身の私的な世界なのであるから、可能なことが表現されていると言うことができる。おそらく、共感的理解をしようとして実際にある程度できていると思っているセラピストは、自分自身の私的な世界を、一部あるいは一時、クライアントの私的な世界であるかのようにして、それ (クライアントの私的な世界のようになった自分の私的な世界) を感じ取っているのだろう。であるならば、

自分自身の私的な世界の中に、一部あるいは一時「別の私的な世界」が構築されることになる。「私的な世界」に関して、このようなことがなぜ可能なのだろうか。

5. 「過去の自分の私的な世界」

実は、<わたし>の私的な世界の中に、「別の」私的な世界が、一部、一時、感じ取ることができる対象として登場することがある。それは、<わたし>の過去の体験である。昨日の痛みを思い出すことを想定してみよう。私は、昨日の痛みを、「このような」痛みだったと、ある「ありありさ」を伴って、「端的に」感じ取ることができる。これは「記憶」と呼ばれる体験の仕組みによって可能になっているのであろう (あるいは、このようなことができることが「記憶」と呼ばれるようになっている)。

もちろん、「今」感じた痛みではないので、昨日まさにその痛みを感じた時に伴っていた「ありありさ」はかなり減衰しているはずだ。しかし、減衰しているにせよ、「ありありさ」が全く伴わないのではなく、思い出している痛みには、ある「ありありさ」が伴っているのではないだろうか。

つまり、まさしく「今」の体験 (見え、聞こえ、感じ、考え、思い) に伴う「ありありさ」ではないが、ある程度の「ありありさ」を伴って、「このように」「端的に」感じ取るということを、私は自分自身の過去の体験について行うことができている。この構造を用いて、「他人の私的な世界」という「別の」私的な世界を、自分自身の私的な世界において生じさせ、感じ取ろうとすることが、「共感的理解」なのではないか。

6. 「あたかも、かのよう」 という断りがなぜ必要なのか

先のロジャーズの説明に、「昨日の痛み」という想定を当てはめてみよう。

昨日の痛みを、あたかも今の痛みであるかのように、感じ取ること、しかし、決して「あたかも、かのよう」 という特質を失わないままで、そうすること

「あたかも、かのよう」が、何か余計な断りのように感じられると思う。それはおそらく、感じ取る

うとして感じ取ることができた昨日の痛みが、「今」感じている痛みでないことが明らかであり、両者の区別はハッキリとできるから、ではないだろうか。ここでの区別は、私自身の体験に関する「今」と「昨日（過去や未来も含めた‘非 - 今’）」の区別であり、これは私自身にとっては間違いようのない対比なのであろう。

さて先に、「過去の自分の私的な世界」を感じ取ることができる、という体験の構造を使って、「他人の私的な世界」を「今の自分自身の私的な世界」に一部、一時構築し、それを、ある「ありありさ」を伴って、「このように」「端的に」感じ取ることができるとした。「あたかも、かのように」という断りが問題にするのは、「私」（とりわけ「私の‘非 - 今’」）と「他人」の区別となるだろう。

これについて、次のようなことを想定してみたい。もしも、他人の痛みを直接感じ取ることができる装置が開発されたとしてみる。

Bさん 「痛いです」

開発者 「Aさん、これがBさんの痛みです」

Aさん 「これ、違う気がするんですけど」

開発者 「いえ、これがBさんの痛みです」

Aさん 「いや、これはBさんの痛みじゃない気がします」

このようなやりとりが可能だと思う。つまり、結局のところ装置の正しさは開発者によっては確かめようがなく、他人であるはずのAさんは、「これ」がBさんの痛みであるかどうかを認定する権利を持つことになってしまう。「これ」がBさんの痛みであるかどうかの判断には、AさんとBさんが言葉でやりとりして確かめるなどの確認作業が必要であろう。ここでは「装置」を仮定したが、これを「セラピストの技術」と置き換えるならば、両者による確認作業はなおさら必要であろう。

他人の感じが、こちらにも感じられる、という身体的な（脳の）根拠はあるだろう。これに関して、実は生じた「感じ」が、どちらの「私的な世界」に属するものなのか、すなわち、自分自身の私的な世界に属するものなのか、自分自身の私的な世界に構築された他人の私的な世界に属するものなのか、その認定は、ある程度柔軟にできてしまうのではないだろうか。

「あたかも、かのように」という断りは、「所在地認定」のし間違いを防ごうとしたものなのではないか。このことはつまり、生じた「感じ」の「所在地認定」は、実はある程度柔軟にできてしまうことが前提とされていることでもあり、この柔軟さがあるからこそ、「共感的理解」が可能なのではないだろうか。

共感の基盤としての身体と感情（雨宮俊彦）

哲学には独我論（Solipsism）と呼ばれる考えがある。確かに存在していると言えるのは自分の精神だけであり、それ以外の他者や環境などのあらゆる存在は単なる推測にすぎないとする考えである。独我論には、理屈好きな青年の妄想に近いところがある。まともな大人の常識からすると、パークリーの独我論的議論に反発したサミュエル・ジョンソンのように他者や物の世界は単なる推測だなどと本当にそう思うなら蹴飛ばして眼を醒まさせてやろうかななどと一喝するか、独我論協会でもつくったらなどと揶揄する程度の考えだろう。

近代哲学で独我論といった奇妙な考えが生まれた背景には、確かな知識の基盤として自らの精神による自明な判断を出発点に確実な知識を求めたデカルトの方法的懐疑がある。デカルトの方法的懐疑は、伝統と集団的弁論に基盤を置いた中世哲学の権威に挑んだ新しい試みだった。そして、デカルトにしろ、パークリーにしろ、推論の結果、他者やさらには神の存在まで追認している。しかし、デカルトが方法的懐疑において精神を身体や社会から切り離して特権化したことは、ダマジオが「デカルトの誤り」（Damasio, 1994）で指弾しているように、20世紀の認知科学における身体や社会から切り離された心へのアプローチの源泉だったし、独我論などといった袋小路の考えを生み出す元にもなった。

心理学では、1960年代以降のデカルト的とも言えるような心への計算論的アプローチ^{注14}を中心とした認知革命の後に、1980年代には感情革命（Kagan, 2007）が生じた。感情革命においては、認知革命においては軽視、あるいは無視されていた、身体が重要な問題として前面に出てきている。ダマジオによ

注14） 認知革命の立役者の一人チョムスキーには「デカルト派言語学」（Chomsky, 1966）などという著書がある。

るデカルト批判は、認知革命に引き続く感情革命の旗幟を宣言したものだと言える。

共感とは可能かという問題設定は、身体や社会から切り離されたデカルト的、独我論的な精神を出発点にしたときのみ、難問ということになるだろう。人間の心を身体や社会に位置づけて丹念に事実をおってみれば、人間の心が同型的な身体の社会的共鳴関係のなかで成立し、デカルト的、独我論的な精神がむしろ事後的な産物であることが明らかになる。

思考と言語に関する領域で、デカルト的、独我論的な考えの倒錯を初めて明確に示したのはヴィゴツキーだった。ヴィゴツキーは、1930年代に内言研究を通じて、発達的に見ると大人の思考は外言としての他者コミュニケーションが、自自コミュニケーションに転化し、さらにそれが内面化したものであることを示した。デカルト的、独我論的想定とは逆に、コミュニケーションが思考に先行するのである。心の形成におけるコミュニケーションと社会の一義性を主張したヴィゴツキーの理論は、1980年代以降に再注目され、ヴィゴツキールネサンスといわれる研究の流れを形成した (Wertsch, 1985)。

感情に関する他者理解、共感においても、我々は、各個人の意識に閉じ込められた主観的感情を起点として、同じく個人的な意識に閉じ込められた他者の感情を推測するのではない。感情は状況の認知的解釈、主観的意識、身体的変化と表出、行動の方向付けなど複数の要素がゆるやかに結びついた複合体に基づく反応である (Shiota & Kalat, 2011)。主観的意識は原則的に個人のなかに閉じ込められているが、物理的な状況は共有され、身体表出は直接に観察される。また、感情の基盤となる無条件情動反射は種として共有されており、条件づけも同じ集団内では共有されることが多い (Baldwin & Baldwin, 2001)。感情という多面的な現象は、主観的意識という水面の上では個人の中に閉じ込められているが、水面下では身体の同型性、環境の共通性を基盤に個人を越えて互いに関連しあっている。

感情心理学では、感情反応における複数の要素のどれを重視するかで様々な学説が乱立してきている。主観的意識を重視しこれを次元構造としてとらえたのが、心理学の創始者とされるヴントである。この立場の現在の代表者は Core Affect 説を唱える Russell である。認知革命以後は、状況の認知的評価を中心に感情を分析しようとする研究が盛んになっ

た。主観的意識、認知的評価ともに感情反応における重要な要素ではあるが、より意識の側の現象である。これに対し、自律神経系を含む身体変化、表情・声・姿勢などの身体的表出、行動の方向付けなどがより密接に身体と結びついた過程であり、1980年代以降、研究が活発化している。例えばこのなかで行動の方向付けを重視し、感情の進化脳理論を提唱しているのが Panksepp である (Panksepp & Biven, 2012)。Zachar & Ellis (2012) では、感情心理学における Panksepp と Russell 両雄間の論争が展開されている。Panksepp が主張する皮質下における七つの一次情動システムに大脳皮質における認知過程が加わって生ずる人間における複雑な感情については、解明すべき点が多く残されている。これに対し、Russell の Core Affect 説は実証的で手堅く、論の組み立ても巧妙である。しかし基本線としては、Russell の立場は意識を重視した逆立ちの論であり、感情現象解明の可能性は身体を重視する Panksepp の方にある。そして、身体レベルにたつと、本シンポジウムにおける研究の最先端の現場からの報告に示されたように、身体的表出の伝染や情動伝染、身体反応の相互の同調、ミラーニューロンなど、感情反応における水面下の同型的な身体が相互に社会的共鳴関係のなかにあることが、事実によって明らかとなる。主観的意識はこうした身体的な過程を基盤として成立する現象である。

ヴィゴツキーや身体を基盤とする感情心理学が明らかにしたように、人間の思考や感情は、個人の意識ではなく、身体と社会関係を基盤に生ずる現象である^{注15)}。現代の心理学は、個人の意識を確実な出発点とするデカルト以来の逆立ちしたアプローチから脱却し、身体と社会関係を基盤に心をとらえ直しつつある。ここで明らかになったのは、自分の思考の理解、自分の感情の理解が、自明でも、確実でもないという事実である。ヴィゴツキーが指摘したように、他者へのコミュニケーションを通じて、自分の思考は初めて明確化される。感情についても、本シンポジウムで福島が指摘したように、共感と自分の身体への気づきは関連している。Siegel (2007) は、

注15) 高次の認知における道具や記号の役割も物理的な環境と社会関係のなかに置かれた身体を基盤に初めて位置づけられる (Andy, 1997)。道具と記号は、複数の個体が共通にアクセスできる共有の文化環境を形成する。

Mindfulness がもたらす効果が安定した愛着がもたらす効果と近いことを指摘し、Mindfulness では自己の受容がなされるが、これが安定した愛着における他者による受容と関連しているからだと説明している。感情に関しても、自己との関係は、他者との関係と連携しているのである。もちろん、こうした共感、連携の一方で、自他の比較過程も普通に生ずる。身体レベルに着目し、自他関係と自自関係の連携に自他の対比も含めて、要因を分析していくことにより、共感の全体像がより明確になるだろう。

4. おわりに

共感 empathy か？ (菅村玄二)

本シンポジウムのタイトルは「共感は可能か？」とした。これに対する端的な回答は、「はい」もしくは「いいえ」である。「わからない」といった答え方もあるだろうが、どのような答えになるかは、共感の定義によるところが大きい。つまり、「共感は可能か？」という問いに対する無難な答えは、「定義による」ということになる。では、そもそも、「共感」とは、どのような意味であろうか。

日本語の「共感」を英語の“empathy”とすれば、それは、しばしば、テオドル・リップス (Theodor Lipps, 1851 1914) が、『心理学原論』(Lipps, 1909) で論じた、ドイツ語の“Einfühlung”の英訳を指すといわれる。ただし、この用語の発端については、諸説あり、エドワード・ティチェナー (Edward B. Titchener, 1867 1927) が 1890 年から 1920 年頃に“Einfühlung”を“empathy”に英訳したという説 (Agosta, 2010) や、“Einfühlung”という言葉は、1858 年に、ドイツの哲学者、ルドルフ・ロツェ (Rudolf H. Lotze, 1817 1881) が造語し、“empathy”は 1903 年から使われているという説 (Harper, 2001 2010) が唱えられてきた。

近年の研究では、“empathy”とは、Titchener (1909) が“Einfühlung”を英訳したものであり、その“Einfühlung”は、Vischer (1873) が自然や芸術などの対象を象徴化する能力を説明するために導入したとされている (Gallese, 2003)。そして、その Vischer (1873) は、人間が「自らを相手のうちに置く」ことによって、無生物や他の動物を理解するメカニズムを提案した Lotze (1858) に強い影響を受けたと言われている。この研究では、Lipps (1903)

が、綱渡りの男性を見て、「彼のなかに自分自身を感じる」という例をあげ、知覚された他者の動きの内なる模倣という観点から、“Einfühlung”を主観性の次元まで拡張した人物として記述されている。なお、Lotze (1858) は、1885 年に英訳されているが、そこには美学的な感情の文脈で“sympathy”という言葉は使われているものの、“empathy”という単語はない。

語源的には、ドイツ語の“Einfühlung”を英訳する際に、ギリシャ語で「(理性を伴わない) 感情や情熱」を意味する“empathia”が元になされたと言われている。ドイツ語の“Einfühlung”は、“ein + Fühlung”であり、ギリシャ語の“empathia”は、“en + pathos”であるが、英語でいえば、いずれも“in + feeling”や“feeling + into”であり、「感情移入」と訳されることもある。

現代の心理学の文脈では、心理療法において、一般に、クライアントに対する共感重要な要素に位置づけられている。たとえば、ロジャーズの場合、クライアントの内的照合枠を正確に、情動的要素や意味とともに知覚することを共感と考え (Rogers, 1959)、これをクライアントに伝えようと努めようとしていることを心理療法の必要十分条件の 1 つにあげている (Rogers, 1957)。のちには、共感が状態ではなくプロセスだと強調し、「他者の私的な知覚世界に入ること」や「一時的にその人の人生において生きること」という言葉を加えて、改めて説明している (Rogers, 1975)。心理療法における他者理解に限らず、平和心理学の分野でも、紛争解決や交渉において、「あたかもその人の目を通して見ているかのような、相手の状況の理解」(Betancourt, 2004) という意味での共感が重視されている。また、共感の生

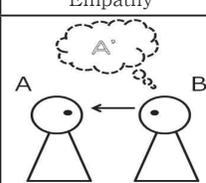
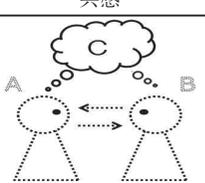
| | Empathy | 共感 |
|------------|--|---|
| 関係の 模式化 |  |  |
| 語義 | in-feeling | co-feeling |
| 意味 | 他者の「中で」感じる | 他者と「共に」感じる |
| 前提 | 独立した2者以上の個人 | 相互依存的な関係 |
| 主体 | You feel so; I feel so. | We feel so. |

Figure 1. Empathy と共感の意味的相違

物学的な基盤に関しては、動物行動学や社会神経科学からのアプローチが盛んになりつつある (e.g., Decety & Ickes, 2009; de Waal, 2009)。

これまでに、共感について、数多く論じられ、また興味もたれてきたが、多かれ少なかれ、その語源にあるように、他者「のなかで感じる」(feeling into) 状態やそのプロセスを意味しているものがほとんどである。つまり、一方が他者のなかに入るというメタファーで表される状態であり、独立した2者以上の個人を前提とする意味では、個人主義的な共感の定義づけといえる。別の言い方をすれば、“I am feeling as if you were feeling.” であり、もっと単純化すれば、“You feel so and I feel so (So do I).” である。

他方、日本語の「共感」はどうだろうか。精選版日本国語大辞典 (2005) によると、『教育・心理理論術語詳解』(1885) において、「同情<略>彼の同病相憐れむと云ふも亦此の意に外ならず。之を共感又は同感と訳するもあり」という記述があり、Titchener (1909) や Lipps (1903) の訳語ではなく、それよりも少なくとも20年ほど古くから使われている言葉である。

「共感」という言葉を字義通り受け取るならば、「共に感じること」であり、少なくともそこには、「のなかに」(into) というニュアンスはない。欧米では、“empathy” は、“in+feel” に由来するが、日本語の共感とは、いわば“co+feel” である。つまり、共感とは、独立した2者以上の個人によって「共有された感じ」か、あるいは、さらにいえば、そもそも、そこには独立した2者以上の個人が必ずしも前提にされておらず、「共に感じられること」のみがあるのかもしれない。これは、“I feel so.” と “You feel so.” という関係ではなく、“We feel so.” という関係性を基盤にした感じ方である。

共感についての見方に対する文化的な相違については、西洋 (欧米) と東洋 (東アジア、とくに日本) における自己観の問題 (e.g., Markus & Kitayama, 1991) とも関係するだろう。つまり、西洋の共感とは、独立した個人を前提にした関係性において生じる、一方の個人の感じを指しているが、東洋の共感とは、関係性を前提にした、相互依存的な個人間で生じる、一方と他方という両者の感じを指しているといえるかもしれない。ただし、「独立した個人」と「相互依存的な個人」と表現する際、そこでいう「個人」の

意味合いは決定的に異なることに注意されたい。

模式化すれば (Figure 1)、個人主義的な見方では、“empathy” とは、個人 A の感情を、個人 B が「あたかも個人 A の感情であるかのように」感じるという、ある意味、一方向的な「感情移入」を指す。つまり、ここでいう「共感」とは、B のなかにある A' となる。ところが、相互依存的な関係主義的な見方では、その本質において、個人 A と個人 B との相互作用のなかで作られたものこそ「共感」(C) であり、双方向性を前提とし、それゆえに「独立した個人」という視点は理論上その特権を失う。

システム論的には、相互作用系では個々の要因 (ここでは自己) は、全体としての創発プロセスのなかでのみ意味をもちうるということであり (Lewis, 2005)、社会的構築主義的には、独立した自己が関係性を形成するのではなく、関係性が個々の自己と呼ばれるものを生み出しているということである (Gergen & Kaye, 1992; Sugamura, Koshikawa, & Haruki, 2007)。そこでいう共感とは、一方から他方への「感情移入」というよりも、関係性のなかでの共同生成的な創発の過程 (process) であると同時に、創発の産物 (product) であろう。臆見を述べるならば、それは生物学的なレベルでの身体性を根本的な基盤にしながらも、当該文化の歴史・風俗・慣習・宗教・政治に依拠した、言葉を通じた人びと同士の間で生まれる意味であり、身体化された共同ナラティブ (embodied collaborative narrative) とでも呼ぶべきものになるかもしれない。

このように論じると、“in-feeling” と “co-feeling” とは対比的、ややもすれば対立的な関係にあるように見える。しかし、おそらく、これらの関係は対比や対立でもなければ、並列でもないだろう。しいていえば、後者は前者を包摂する関係にあるか、もしくは、“co-feeling” としての共感に至る段階の1つが “in-feeling” という感情移入であると見たほうがよいように思われる。

心理学における「共感」の研究とは、これまでは多くの場合「感情移入」の研究であったし、これからもそうであろう。それには、日常的、もしくは科学的な言語による記述のしやすさも背景にあり、そのような見方をすることによって、研究が進展していくという側面が多分にある。ただ、<共感とは可能か?>という問いを、<感情移入は可能か?>という言葉に置き換えたとき、どこかしっくりこない、

あるいは何かは抜け落ちた感じがするとしたら、その何かを突き詰めていくことによって、共感という現象の全体像が見えてくるかもしれない。

引用文献

共感の定義をめぐって (串崎真志)

- Baron Cohen, S. (2012). *Zero degrees of empathy: A new theory of human cruelty and kindness*. London: Penguin Books.
- Bateson, M., Nettle, D., & Roberts, G. (2006). Cues of being watched enhance cooperation in a real world setting. *Biology Letters*, 2, 412-414.
- Batson, C. D. (2011). *Altruism in humans*. New York: Oxford University Press. [菊池章夫・二宮克美訳 (2012). 利他性の人間学 新曜社]
- Batson, C. D., Batson, J. G., Griffitt, C. A., Barrientos, S., Brandt, J. R., Sprengelmeyer, P., & Bayly, M. J. (1989). Negative-state relief and the empathy-altruism hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 922-933.
- Batson, C. D. (2012). The empathy-altruism hypothesis: Issues and implications. In J. Decety (Eds.), *Empathy: From bench to bedside*. (pp.41-54). Cambridge MA: Massachusetts Institute of Technology Press.
- Campbell M, W., & de Waal, F. B. M. (2011). Ingroup-outgroup bias in contagious yawning by chimpanzees supports link to empathy. *PLoS ONE*, 6 (4), e18283.
- Cialdini, R. B., Schaller, M., Houlihan, D., Arps, K., Fultz, J., & Beaman, A. L. (1987). Empathy-based helping: Is it selflessly or selfishly motivated? *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 749-758.
- Cosmides, L. (1989). The logic of social exchange: Has natural selection shaped how humans reason? Studies with the Wason selection task. *Cognition*, 31, 187-276.
- de Waal, F. B. M. (2012). The antiquity of empathy. *Science*, 336, 874-876.
- Eagleman, D. (2011). *Incognito: The secret lives of the brain*. New York: Pantheon Books. [大田直子訳 (2012). 意識は傍観者である 早川書房]
- 小林孝雄 (2012). 他人の体験を理解するとはどういうことか? 関西大学大学院心理学研究科シンポジウム「共感とは可能か?」発表
- 串崎真志 (2013) 共感する心の科学 風間書房
- Milinski, M., Semmann, D., Krambeck, H.-J., & Marotzke J. (2006). Stabilizing the Earth's climate is not a losing game: Supporting evidence from public

goods experiments. *Proceedings of the National Academy of Sciences the USA*, 103, 3994-3998.

- 嶺本和沙・中嶋智史・吉川左紀子 (2010). 恐怖・悲しみ表情の強度と援助動機・援助必要性判断 日本心理学会第74回大会発表論文集, 985.
- 岡村達也 (2012). Empathic understanding の origin 関西大学大学院心理学研究科集中講義
- Rogers, C. R. (1951). *Client-centered therapy: It's current practice, implications, and theory*. Boston MA: Houghton Mifflin. [保坂亨・諸富祥彦・末武康弘訳 (2005). クライアント中心療法 岩崎学術出版社]
- Trivers, R. L. (1971). The evolution of reciprocal altruism. *Quarterly Review of Biology*, 46, 35-57.
- Yamagishi, T., Tanida, S., Mashima, R., Shimoma, E., & Kanazawa S. (2003). You can judge a book by its cover: Evidence that cheaters may look different from cooperators. *Evolution and Human Behavior*, 24, 290-301.
- Young, L., Koenigs, M., Kruepke, M., & Newman, J. P. (2012). Psychopathy increases perceived moral permissibility of accidents. *Journal of Abnormal Psychology*, 121 (3), 659-667.

Empathic Understanding の起源 (岡村達也)

- Bozarth, J. D. (2011). Foreword. In K. A. Moon, M. Witty, B. Grant, & B. Rice, (Eds.) (2011). *Practicing client-centered therapy: Selected writings of Barbara Temaner Brodley*. PCCS Books. pp. iii-iv.
- Freud, S. (1937). *Analysis terminable and interminable*. In *The standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud*. Vol. 23. pp. 209-253.
- Kirschenbaum, H. (1979). *On becoming Carl Rogers*. Delacorte Press.
- Kirschenbaum, H. (2007). *The life and work of Carl Rogers*. PCCS Books.
- 小林孝雄 (2010). 共感 岡村達也・小林孝雄・菅村玄二 カウンセリングのエチュード—反射・共感・構成主義— 遠見書房 pp. 69-145.
- Lee, R. R., Rountree, A., & McMahon, S. (2009). *Five Kohutian postulate: Psychotherapy theory from an empathic perspective*. Jason Aronson.
- Menninger, K. (1959). *Theory of psychoanalytic technique*. Basic Books.
- Moon, K. A., Witty, M., Grant, B., & Rice, B. (Eds.) (2011). *Practicing client-centered therapy: Selected writings of Barbara Temaner Brodley*. PCCS Books.
- 岡村達也 (1999). カウンセリングの条件—純粋性・受容・共感をめぐって— 岡村達也 (2007). カウンセリングの条件—クライアント中心療法の立場から—

- 日本評論社 pp.13-141.
- 岡村達也 (2012). empathic understanding の origin — その rationale としての alter ego — 未定稿私家版 (このはな児童学研究所、日本カウンセリング研究会 本部、全日本カウンセリング協議会、関西大学大学院 等における講座 / 講義等の配付資料)
- Raskin, N. (2001). The history of empathy in the client-centered movement. In G. Wyatt (Ed.), *Rogers' therapeutic conditions: Evolution, theory and practice*. Vol. 2. *Empathy*. PCCS Books. pp. 1-15.
- Rogers, C. R. (1942). *Counseling and psychotherapy: Newer concepts in practice*. Houghton Mifflin.
- Rogers, C. R. (1949). The attitude and orientation of the counselor in client-centered therapy. *Journal of Consulting Psychology*, **13**, 82-94.
- Rogers, C. R. (1951). *Client-centered therapy: Its current practice, implications, and theory*. Houghton Mifflin.
- Rogers, C. R. (1957). The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology*, **21**, 95-103.
- Rogers, C. R. (1959). A theory of therapy, personality, and interpersonal relationships, as developed in the client-centered framework. In S. Koch, *Psychology: A study of a science*. Vol. 3. *Formulation of the person and the social context*. New York: McGraw-Hill. pp. 184-256.
- Rogers, C. R. (1974). Remarks on the future of client-centered therapy. In D. A. Wexler & L. N. Rice (Eds.), *Innovations in client-centered therapy*. Wiley. pp. 7-13.
- Rogers, C. R. (1975). Empathic: An unappreciated way of being. In Rogers, C. R. (1980). *A way of being*. pp.137-163.
- Spinelli, E. (2005). *The interpreted world: An introduction to phenomenological psychology*. Sage.
- 湯浅正彦 (1998). 権利問題 / 事実問題 廣松 渉・子安 宣邦・三島憲一・宮本久雄・佐々木力・野家啓一・末 木文美士 (編) 岩波哲学・思想事典 岩波書店 pp. 474-475.
- 自伝的記憶と共感 (関口理久子)**
- Alea, N. & Bluck, S. (2003) Why are you telling me that? A conceptual model of the social function of autobiographical memory. *Memory*, **11**, 165-178.
- Bluck, S., Baron, J. M., Ainsworth, S. A., Gesselman, A. N. & Gold, K. L. (2013) Eliciting empathy for adults in chronic pain through autobiographical memory sharing. *Applied Cognitive Psychology*, **27**, 81-90.
- Byre, Hyman, Jr. & Scott, (2001) Comparisons of memories for traumatic events and other experiences. *Applied Cognitive Psychology*, **15**, 119-133.
- Cabeza, R. & St Jacques, P. (2007) Functional neuroimaging of autobiographical memory. *Trends in Cognitive Neuroscience*, **11**, 19-227.
- Conway, M. A. (1990) *Autobiographical Memory: An introduction*. Open University Press. Milton Keynes, Philadelphia.
- Conway, M. A. & Pleydell-Pearce, C. W. (2000) The construction of autobiographical memories in the self-memory system. *Psychological Review*, **107**, 261-288.
- Conway M. A. (2005) Memory and the self. *Journal of Memory and Language*, **53**, 594-628.
- Conway, M. A., Wang, Q., Hanyu, K., & Haque, S. (2005). A cross-cultural investigation of autobiographical memory: On the universality and cultural variation of the reminiscence bump. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **36**, 739-745.
- D'Argembeau, A & Van der Linden (2008) Remembering pride and shame: self-enhancement and the phenomenology of autobiographical memory. *Memory*, **16**, 538-547.
- Mitchell, J. P. (2009) Inferences about mental states. *Philosophical Transactions of the Royal Society B*, **364**, 1309-1316.
- Rathbone, C. J., Moulin, C. J. & Conway, M. A. (2006) Self-centered memories: The reminiscence bump and the self. *Memory & Cognition*, **36**, 1403-1414.
- Rubin, D. C., Wetzler, S. E. & Nebes, R. D. (1986) Autobiographical memory across the lifespan. In Rubin, D. C. (Ed.) *Autobiographical memory* (pp. 202-221). Cambridge: Cambridge University Press.
- Shamay-Tsoory, S. G. (2011) The neural bases for empathy. *The Neuroscientist*, **17**, 18-24.
- 関口理久子 (2005) 自伝的記憶と情動：情動的自伝的記憶の神経学的基盤 関西大学社会学部紀要、**37**、87-116.
- 関口理久子 a (2012) 関西大学心理学研究、**3**、15-26.
- 関口理久子 b (2012) 日本心理学会第76回大会発表論文集。
- 顔から心を読む—共感と表情認知— (中嶋智史)**
- Adolphs, R., Tranel, D., Damasio, H., & Damasio, A. (1994). Impaired recognition of emotion in facial expressions following bilateral damage to the human amygdala. *Nature*, **372**, 669-672.
- Barrett, L. F. (2006). Are emotions natural kinds?

- Perspectives on Psychological Science*, 1, 28-58.
- Barrett, L. F., & Wager, T. D. (2006). The structure of emotion. Evidence from neuroimaging studies. *Current Directions in Psychological Science*, 15, 79-83.
- Bastiaansen, J. A. C. J., Thioux, M., & Keysers, C. (2009). Evidence for mirror systems in emotions. *Philosophical transactions of the Royal Society of London. Series B, Biological sciences*, 364, 2391-2404.
- Bogart, K. R., & Matsumoto, D. (2010). Facial mimicry is not necessary to recognize emotion: Facial expression recognition by people with Moebius syndrome. *Social neuroscience*, 5, 241-251.
- Botvinick, M., Jha, A. P., Bylsma, L. M., Fabian, S. A., Solomon, P. E., & Prkachin, K. M. (2005). Viewing facial expressions of pain engages cortical areas involved in the direct experience of pain. *NeuroImage*, 25, 312-319.
- Darwin, C. (1872). *Facial expressions of emotion in man and animals*. London: John Murray. 浜中浜太郎 (訳) (1991). 人及び動物の表情について 岩波書店
- Dimberg, U. (1982). Facial reactions to facial expressions. *Psychophysiology*, 19, 643-647.
- Dimberg, U., Thunberg, M., & Elmehed, K. (2000). Unconscious facial reactions to emotional facial expressions. *Psychological Science*, 11, 86-89.
- Ekman, P. (1972). Universals and cultural differences in facial expressions of emotion. In J. Cole (Ed.), *Nebraska symposium on motivation*. Vol.19, Lincoln: University of Nebraska Press. Pp.207-283.
- Ekman, P. & Friesen, W. V. (1976). *Picture of facial affect*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists.
- Ekman, P., Friesen, W. V., O'Sullivan, M., LeCompte, W. A., Ricci-Bitti, P. E., Tomita, M., & Tzavaras, A. (1987). Universals and cultural differences in the judgements of facial expressions of emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 712-717.
- 遠藤利彦 (1996). 喜怒哀楽の起源-情動の進化論・文化論 岩波科学ライブラリ 岩波書店
- Goldman, A. I., & Sripada, C. S. (2005). Simulationist models of face-based emotion recognition. *Cognition*, 94, 193-213.
- Hess, U., & Blairy, S. (2001). Facial mimicry and emotional contagion to dynamic emotional facial expressions and their influence on decoding accuracy. *International journal of psychophysiology*, 40, 129-141.
- Hugenberg, K. (2005). Social categorization and the perception of facial affect: Target race moderates the response latency advantage for happy faces. *Emotion*, 5, 267-276.
- Leppänen, J. M., & Hietanen, J. K. (2003). Affect and face perception: odors modulate the recognition advantage of happy faces. *Emotion*, 3, 315-326.
- Likowski, K. U., Mu, A., Seibt, B., Pauli, P., & Weyers, P. (2008). Modulation of facial mimicry by attitudes. *Journal of Experimental Social Psychology*, 44, 1065-1072.
- Marsh, A. A., & Ambady, N. (2007). The influence of the fear facial expression on prosocial responding. *Cognition & Emotion*, 21, 225-247.
- McIntosh, D. N., Reichmann-Decker, A., Winkielman, P., & Wilbarger, J. L. (2006). When the social mirror breaks: deficits in automatic, but not voluntary, mimicry of emotional facial expressions in autism. *Developmental science*, 9, 295-302.
- 嶺本和沙・中嶋智史・吉川左紀子 (2010). 恐怖・悲しみ表情の強度と援助動機・援助必要性判断 日本心理学会第74回大会発表論文集, 985.
- Morris, J. S., Frith, C. D., Perrett, D. I., Rowland, D., Young, A. W., Calder, A. J., & Dolan, R. J. (1996). A differential neural response in the human amygdala to fearful and happy facial expressions. *Nature*, 383, 812-815.
- Nakashima, S. F., Minemoto, K., Kanbe, T., Horikawa, S., Sanada, Y., & Yoshikawa, S. (2009, August). *The influence of facial expression and gaze direction on motivation of helping*. International Society for Research on Emotion 2009, Leuven, Belgium.
- 中嶋智史・森本裕子・吉川左紀子 (2009). 表情認知における暗闇の効果 電子情報通信学会技術報告, 109 (345), 41-46.
- Neal, D. T., & Chartrand, T. L. (2011). Embodied emotion perception: Amplifying and dampening facial feedback modulates emotion perception accuracy. *Social Psychological and Personality Science*, 2, 673-678.
- Niedenthal, P. M. (2007). Embodying emotion. *Science*, 316, 1002-1005.
- 布井雅人・中嶋智史・吉川左紀子 (2012). 表情認知における社会的排斥の効果—排斥されると悲しみ顔が嫌いになる— 日本心理学会第76回大会発表論文集
- Oberman, L. M., Winkielman, P., & Ramachandran, V. S. (2007). Face to face: blocking facial mimicry can selectively impair recognition of emotional expressions. *Social neuroscience*, 2, 167-178.
- Russell, J. A. (1994). Is there universal recognition of

- emotion from facial expression? A review of the cross-cultural studies. *Psychological bulletin*, 115, 102-141.
- Simon, D., Craig, K. D., Miltner, W. H. R., & Rainville, P. (2006). Brain responses to dynamic facial expressions of pain. *Pain*, 126, 309-318.
- Small, D. A., & Verrochi, N. M. (2009). The face of need: Facial emotion expression on charity advertisements. *Journal of Marketing Research*, 46, 777-787.
- Whalen, P. J., Rauch, S. L., Etcoff, N. L., McInerney, S. C., Lee, M. B., & Jenike, M. a. (1998). Masked presentations of emotional facial expressions modulate amygdala activity without explicit knowledge. *The Journal of neuroscience*, 18, 411-418.
- Wicker, B., Keysers, C., Plailly, J., Royet, J. P., Gallese, V., & Rizzolatti, G. (2003). Both of us disgusted in My insula: the common neural basis of seeing and feeling disgust. *Neuron*, 40, 655-664.
- Wild, B., Erb, M., & Bartels, M. (2001). Are emotions contagious? Evoked emotions while viewing emotionally expressive faces: quality, quantity, time course and gender differences. *Psychiatry research*, 102, 109-124.
- 脳の中の自己と他者—共感を支える認知神経メカニズム— (福島宏器)
- Avenanti A, Buetti D, Galati G, Aglioti SM. Transcranial magnetic stimulation highlights the sensorimotor side of empathy for pain. *Nat Neurosci*. 2005; 8: 955-60.
- Azevedo, R. T., Macaluso, E., Avenanti, A., Santangelo, V., Cazzato, V., Aglioti, S. M. (2012). Their pain is not our pain: Brain and autonomic correlates of empathic resonance with the pain of same and different race individuals. *Hum Brain Mapp*. 2012 Jul 17. doi: 10.1002/hbm.22133. [Epub ahead of print]
- Beckes, L., Coan, J. A., Hasselmo, K. (2012). Familiarity promotes the blurring of self and other in the neural representation of threat. *Soc Cogn Affect Neurosci*. 2012 Jun 13. [Epub ahead of print]
- Cheng, Y., Lin, C., Liu, H.L., Hsu, Y., Lim, K., Hung, D., Decety, J., 2007. Expertise modulates the perception of pain in others. *Current Biology* 17, 1708-1713.
- Decety J, Lamm C. (2006) Human empathy through the lens of social neuroscience. *Scientific World Journal*. 6: 1146-63.
- Di Pellegrino G, Fadiga L, Fogassi L, Gallese V, Rizzolatti G. 1992. Understanding motor events: a neurophysiological study. *Exp. Brain Res*. 91: 176-80
- Engen, H. G., & Singer, T. (2012). Empathy circuits. *Curr Opin Neurobiol*. 2012 Dec 5. [Epub ahead of print]
- Fukushima, H., Hiraki, K. (2006) Perceiving an opponent's loss: gender-related differences in the medial-frontal negativity. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, 1(2), 149-157.
- Fukushima, H., Hiraki, K. (2009) Whose loss is it? Human electrophysiological correlates of non-self reward processing. *Social Neuroscience*. 4(3), 261-75.
- 福島宏器 (2009) 他人の損失は自分の損失?—共感の神経的基盤をさぐる (開一夫・長谷川寿一編『ソーシャルブレインズ』第9章、東京大学出版会) 191 ~ 215.
- Fukushima, H., Terasawa, Y., Umeda, S. (2011) Association between interoception and empathy: Evidence from heartbeat-evoked brain potential. *International Journal of Psychophysiology*. 79(2), 259-265.
- 福島宏器 (2011) ミラーとメンタライジング: 社会脳の見取り図 (子安増生・大平英樹編『ミラーニューロンと<心の理論>』第5章、新曜社) 153-193.
- Harris, L. T. & Fiske, S. T. (2006). Dehumanizing the lowest of the low: neuroimaging responses to extreme out-groups. *Psychol. Sci*. 17, 847-853.
- Iacoboni, M., Woods R. P., Brass, M., Bekkering, H., Mazziotta, J. C., Rizzolatti, G. (1999) Cortical mechanisms of human imitation. *Science*, 286: 2526-28
- Jackson PL, Meltzoff AN, Decety J. How do we perceive the pain of others? A window into the neural processes involved in empathy. *Neuroimage*. 2005; 24: 771-9.
- Keysers C, Wicker B, Gazzola V, Anton JL, Fogassi L, Gallese V. A touching sight: SII/PV activation during the observation and experience of touch. *Neuron*. 2004; 42: 335-46.
- Lamm, C., Nusbaum, H.C., Meltzoff, A.N., Decety, J., 2007. What are you feeling? Using functional magnetic resonance imaging to assess the modulation of sensory and affective responses during empathy for pain. *PLoS ONE* 12, e1292.
- Preston, S. D., Bechara, A., Grabowski, T. J., Damasio, H., Damasio A. R. (2007) The neural substrates of cognitive empathy. *Social Neuroscience*, 2(3-4), 254-275.
- Preston, S. D., de Waal, F. B. (2002) Empathy: Its ultimate and proximate bases. *Behav Brain Sci*. 25, 1

-20.

- Rizzolatti, G., Fadiga, L., Fogassi, L., Gallese, V. (1996) Premotor cortex and the recognition of motor actions. *Cogn. Brain Res.*, 3, 131-41.
- Rizzolatti, G., Fogassi, L., Gallese, V. (2006) Mirrors in the mind. *Scientific American*, 295(5): 54-61. (リゾラッティ、フォガッシ、ガレーゼ (2007) 『人を映す脳の鏡』、日経サイエンス 2007 年 2 月号)
- Seger CA, Stone M, Keenan JP. Cortical Activations during judgments about the self and an other person. *Neuropsychologia*. 2004; 42: 1168-77.
- Singer, T., Seymour, B., O' Doherty, J., Kaube, H., Dolan, R. J., Frith, C. D. (2004) Empathy for pain involves the affective but not sensory components of pain. *Science*, 303, 1157-62.
- Singer, T., Seymour, B., O' Doherty, J. P., Stephan, K. E., Dolan, R. J., Frith, C. D. (2006) Empathic neural responses are modulated by the perceived fairness of others. *Nature*, 439 (7075), 466-9.
- Takahashi H, Kato M, Matsuura M, Mobbs D, Suhara T, Okubo Y (2009) When your gain is my pain and your pain is my gain: neural correlates of envy and Schadenfreude. *Science* 2009, 323: 937-939.
- Vogeley K, Bussfeld P, Newen A, Herrmann S, Happe F, Falkai P, Maier W, Shah NJ, Fink GR, Zilles K. (2001). Mind reading: Neural mechanisms of theory of mind and self-perspective. *NeuroImage*, 14, 170-181.
- Xu, X., Zuo, X., Wang, X., Han, S., 2009. Do you feel my pain? Racial group membership modulates empathic neural responses. *Journal of Neuroscience* 29, 8525-8529.
- 他人の体験を理解するとはどういうことか？—セラピストの共感的理解— (小林孝雄)
- 小林孝雄 (2010) 共感. In 岡村達也・小林孝雄・菅村玄二 (2010) 『カウンセリングのエチュード』 遠見書房。
- 永井均 (2006) 『西田幾多郎—絶対無—とはなにか』 日本放送出版協会。
- Rogers, C. (1957) : The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology*, 21, 95-103.
- 共感の基盤としての身体と感情 (雨宮俊彦)
- Andy, C. (1996) *Being there: Putting brain, body, and world together again*. MIT Press.
- Baldwin, J. D. & Baldwin, J. I. (2000) *Behavior principles in everyday life*, 4th ed. Pearson.
- Chomsky, N. (1966) *Cartesian linguistics: A chapter in the history of rationalist thought*, Cambridge University Press.
- Damasio, A. (1994) *Descartes'error: Emotion, reason, and the human brain*, Picador.
- Kagan, J. (2007) *What is emotion?: History, measures, and meanings*, Yale University Press.
- Panksepp, J. & Biven, L. (2012) *The archaeology of mind: Neuroevolutionary origins of human emotions*, W W Norton & Co Inc.
- Shiota, M. & Kalat, J. W. (2011) *Emotion*, 2nd ed. Wadsworth Publishing.
- Siegel, D, J. (2007) *The mindful brain: Reflection and attunement in the cultivation of well-being*, W. W. Norton & Company.
- Wertsch, J, V. (1985) *Vygotsky and the social formation of mind*, Harvard University Press.
- Zachar, P. & Ellis, R, D. (Eds.) (2012) *Categorical versus dimensional models of affect: A seminar on the theories of Panksepp and Russell*, John Benjamins Pub Co.
- 共感は Empathy か？ (菅村玄二)
- Agosta, L. (2010). *Empathy in the context of philosophy*. Hampshire, UK: Palgrave Macmillan.
- Betancourt, H. (2004). Attribution-emotion processes in White's realistic empathy approach to conflict and negotiation. *Peace & Conflict: Journal of Peace Psychology*, 10, 369-380.
- Decety, J., & Ickes, W. (Eds.). (2009). *The social neuroscience of empathy*. Cambridge, MA: Bradford/MIT Press.
- de Waal, F. (2009). *The age of empathy: Nature's lessons for a kinder society*. New York: Harmony. 柴田裕之 (訳) (2010). 共感の時代へ：動物行動学が教えてくれること 紀伊國屋書店。
- Gallese, V. (2003). The roots of empathy: The shared manifold hypothesis and the neural basis of intersubjectivity. *Psychopathology*, 36, 171-180.
- Gergen, K. J., & Kaye, J. (1992). Beyond narrative in the negotiation of therapeutic meaning. In S. McNamee & K. J. Gergen (Eds.), *Therapy as social construction* (pp. 166-185). London: Sage.
- Harper, D. (2001-2010). Empathy. *Online etymology dictionary*. Retrieved September 12, 2010 from <http://www.etymonline.com>
- Lewis, M. D. (2005). Bridging emotion theory and neurobiology through dynamic systems modeling. *Behavioral and Brain Sciences*, 28, 169-194.
- Lipps, T. (1903). Einfühlung, innere Nachahmung und

- Organempfindung. *Archiv für die gesamte Psychologie*, 1, 185-204.
- Lipps, T. (1899). *Leitfaden der Psychologie*. Leipzig, Germany: Verlag von Wilhelm Engelmann. 大脇義一 (訳) (1934). 心理學原論 岩波書店.
- Lotze, H. (1885). *Microcosmus: An essay concerning man and his relation to the world* (E. Hamilton & E. C. Jones, Trans.). Edinburgh: T. & T. Clark. (Original work published 1858, *Mikrokosmos: Ideen zur Naturgeschichte und Geschichte der Menschheit*. Leipzig: Verlag von S. Hirzel.)
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Rogers, C. R. (1957). The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology*, 21, 95-103.
- Rogers, C. R. (1959). A theory of therapy, personality, and interpersonal relationship as developed in the client-centered framework. In S. Koch (Ed.), *Psychology: A study of a science, Vol. 3. Formulations of the person and the social context* (pp. 184-256). New York: McGraw-Hill.
- Rogers, C. R. (1975). Empathic: An unappreciated way of being. *Counseling Psychologist*, 5, 2-10.
- Sugamura, G., Haruki, Y., & Koshikawa, F. (2007). Building more solid bridges between Buddhism and Western psychology. *American Psychologist*, 62, 1080-1081.
- Titchener, E. B. (1909). *Lectures on the experimental psychology of thought processes*. New York: Macmillan.
- Vischer, R. (1873). Über das optische Formgefühl: Ein Beitrag zur Ästhetik. In R. Vischer (Ed.), (1927), *Drei Schriften zum ästhetischen Formproblem* (pp. 1-44). Halle, Saale: M. Niemeyer.